資料３

「京都基本構想（仮称）」（案）に対する
第６回審議会欠席委員の御意見

１　榊田委員

・　全く違和感ない。本質的なところを突いた中長期のものになっている。まさしくほんもの志向。これが市民レベルに落とした時に、「今日の生活の方が大事。」といった意見が一定出ると思うが、これはすごく京都らしいビジョンだと思う。

・　これをどう市民に理解してもらうかが重要。

・　いつの時代もコミュニティを大事にするということが、市民のプライドにもつながる。京都らしさというのは、やはり人と人との関係性を大事にすること。

・　京都の経済界も捨てたものではない。千年続くまちを作りたいという意味において、極端に近づきすぎず、ぶつからず喧嘩せずみたいな。お互い少し間を取り、それで長く付き合う秘訣みたいなところが、一番京都っぽいと思うところ。変に近づきすぎない、だからその人を信じるまで時間がかかる。良いところではあるが、オープンイノベーションは難しい。ただし根っこでは繋がっている。

２　田中委員

・　難しい漢字がいくつかある。学生たちが読むことを考えると、フリガナを振るか、言葉遣いに強いこだわりがなければ、優しい言葉遣いにした方が読みやすくなると感じた。また、例えば、音声版があるだけでも変わると思う。

・　第三章第一節の記載について、デジタル化が進展したこと自体は良いことだと思っている。しかし、本当に因果関係が正しいかをデータから読み取るのは難しい。そのため、「人々の生活利便性が向上した」くらいの標記で留めておくのも良いかもしれない。また、「デジタル化によって雇用の流動性が高まり…」という箇所についても、デジタル化によって起こったわけではなく社会の流れではないかと感じる。さらに、「転職・副業」の表現について、転職と副業を中点でつなぐ表現はあまり使わない。転職と副業は別ものである。記載するとしたら「転職、副業・兼業」が望ましいのではないか。

・　「結び」というタイトルがもったいないと感じた。全体のまとめのような印象を受けるので、読まれない可能性があるのではないか。「皆さんに問いたい」のような表現のほうが人々に読まれるのではないだろうか。

３　堀場委員

・　「恢復」という漢字はまず読めない。本文は品格を保ちつつ、分かりやすいものを別途作成するなどの工夫が必要ではないか。
・　「ほんまもん」という言葉は使ってほしいと思っていた。「ほんもの」ではない。「ほんまもん」はそこに精神性も入っている。京都の人は、やはりそれにこだわっていると思う。それが海外の人たちにとっての魅力であり、自分たちが持ってない価値観なのだと思う。海外の場合は古びたらそれで終わりであるが、京都はむしろ古びていることがほんまもんになっていく。木造建築にしても、「なんでこんな古い建物」と思うところ、京都では全然そうは思えない。そこに何かが流れている。それは我々が永久に追求していかないといけないものかもしれない。

４　牧委員

・　格調が高い文章を分からないと思いながら読むのも良い。分からなければ生成ＡＩで要約するなどの手段が今はある。あえてこの格調でいくことをどこかに書いても良いかもしれない。
・　現行基本構想の自己責任という感じがなくなり、柔らかくなった一方で、格調は残っていて良い。
・　「矜持」は良い言葉。例えば、建築物の耐震をしていないのは自己責任と言えばそうだが、自己責任とせず、「耐震しないといけないよ。」という姿勢で対応する。そういうところに行政職員の矜持がある。それぞれの担い手の矜持があり、一方的に突き放さない節度がある。
・　経済の要素が直接的に表現されていない気がする。説明する時に、ここが経済だと言わないといけない。もう少し分かりやすく出した方が良いかもしれない。